

第1章 大学院の理念・目的

1. 現状の説明

(1) 沿革

武蔵野美術大学の大学院修士課程は「学部における一般的、専門的教育の基礎の上に、美術、デザインに関する専門の技能、理論および応用を教授研究し、その新奥を究めた人材を養成し、もって文化の発展に寄与する」ことを目的として1973年に設置された（本学大学院規則第一条）。設置当初は2専攻8コースであったが、その後の短期大学部の廃止による学科の増加、研究領域の細分化によりコースが増え、美術専攻には日本画、油絵、版画、彫刻、造形学、芸術文化政策の6コースが、デザイン専攻には視覚伝達デザイン、工芸工業デザイン、空間演出デザイン、建築、基礎デザイン学、映像、写真、デザイン情報学の8コースが設けられ、現在では14コースに至っている。そして、この修士課程のコース名を見ればわかるように、修士課程は学部学科とその専攻との連動性が高く、それら学科と専攻の独自の運営の中で成り立っているのが現状と言えるだろう。

また、2004年には博士後期課程が「美術、デザイン、映像、をはじめとする、今日の造形芸術における表現領域は、専門化し深化する一方で、多様化、横断化、複合化へ向かう状況が生じています。この状況に対応するために、専門性を深めつつ、隣接する造形芸術の領域や関連する学術の成果をふまえて、それらの連携のもとに表現や研究をなし得る人材の養成を目指す」という趣旨のもと開設された。これは文字どおり、各コースで学んだ専門性をより広い領域において研究または深めようとするもので、その運営は博士後期課程運営委員会として、学科や研究室から切り離し、その専攻を造形芸術として、作品制作研究領域、環境形成研究領域、美術理論研究領域と3つの領域を設けている。造形芸術専攻の入学定員は6名として、修士課程の2専攻の入学定員56名と比較しても少人数とした。授与される学位は博士（造形）と定められ、従来の修士課程は、博士前期課程（修士課程）となった。

大学院年表

1962（昭和37）年	武蔵野美術大学設置
1966（昭和41）年	造形学部造形専攻科（一年制）開設（1973年廃止）
1972（昭和47）年	大学院設置認可申請（翌年3月認可）
1973（昭和48）年	大学院造形研究科（修士課程・二年制）を設置し、同美術専攻に日本画コース・油絵コース・彫刻コース、同デザイン専攻に商業デザインコース・工芸工業デザインコース・芸能デザインコース・建築コース・基礎デザインコースを開設
1980（昭和55）年	大学院造形研究科デザイン専攻商業デザインコースを視覚伝達デザインコースと改称
1985（昭和60）年	大学院造形研究科デザイン専攻芸能デザインコースを空間演出デザインコースと改称
1987（昭和62）年	大学院造形研究科美術専攻に版画コースを開設
1988（昭和63）年	大学院造形研究科美術専攻に造形コースを開設
1991（平成3）年	大学院規則と学位規則を改正、修士課程修了者の学位を「芸術学修士」から「修士（造形）」とする

- 1994（平成6）年 大学院造形研究科デザイン専攻に映像コースを開設
- 1996（平成8）年 大学院造形研究科デザイン専攻基礎デザインコースが、基礎デザイン学コースとなる
- 2003（平成15）年 大学院造形研究科美術専攻に芸術文化政策コース、デザイン専攻にデザイン情報学専攻を開設
- 2004（平成16）年 大学院造形研究科博士後期課程（博士課程・三年制）を設置し、造形芸術専攻に作品制作領域・環境形成領域・美術理論研究領域を開設
- 2005（平成17）年 博士後期課程課程長に滝沢具幸が就任
- 2006（平成18）年 大学院造形研究科デザイン専攻に写真コースを開設
- 2008（平成20）年 大学院造形研究科美術専攻造形学コースが、造形理論・美術史コースとなる

(2) 大学院の理念、目的、教育目標

本学（造形学部）の建学の精神

武蔵野美術大学の教育理念は、1929（昭和4）年10月1日、帝国美術学校が吉祥寺の地に創立されたときに起草されたものである。

帝国美術学校の創設に寄与し、後にその経営と教育の中心となった金原省吾（東洋美術史家、教務主任）の手記に「教養を有する美術家養成」と記され、美術学校創立者のひとり名取堯（主事）の『武蔵野美術』（30周年記念号）に寄せられた回顧に「その框を固定せず、しかも放縦に任せず、真に人間的自由に達するような美術教育への願い」であると語られており、1930（昭和5）年制定の校歌では、北原白秋が「道に遊ばむ」、
「堪えて忍ばむ」、
「外へ矜らむ」と謳っている。

美術を技術的専門性だけではなく、総合的な人間形成をもって成るものと考えたのである。まさに人間的自由に達するために美術・デザインを追求することこそが、本学の教育理念であると言うことができ、造形教育の総合的な大学となった現在も、この教育理念を継承し堅持している。

大学院造形研究科の理念・目的

武蔵野美術大学の大学院は、本学の建学の精神に基づいて、造形学部で培った能力のさらなる発展を期するものである。武蔵野美術大学大学院規則第一条に記すとおり、造形学部における一般的・専門的教育の基礎のうえに、美術・デザインに関する専門の技能、理論および応用を教授研究し、その深奥を究めた人材を養成し、もって文化の創造・発展に寄与することを目的としている。（『武蔵野美術大学のあゆみ1929—2009』）

この理念に基づいて、大学院造形研究科の教育目標が置かれている。理念にあるような学部教育からの発展性を見るためにも、造形学部の教育目標とその展開（『武蔵野美術大学科目履修ガイドブック2010 共通』）を確認する必要がある。

「武蔵野美術大学造形学部は、幅広い教養を備え、人格的にも優れた美術・デザインを中心とする造形各分野の専門家養成とともに、美術とデザインの領域における総合的な造形教育の中心として、広く知識を受けるとともに、深く専門の技能、理論や応用を教授研究し、豊かな美的教養をそなえた社会人を育成する任をも負い、文化の創造発展と社会に貢献することを目的としています。

現在、わが国の高等教育制度は大きな変動期にあり、とりわけ大学では専門領域にのみ埋没することが特性でもあるかのような考え方が一部にあります。しかし、造形に関する最も優れた基本教育をめざす本学は、必ずしもそうした姿勢をとっていません。

造形の各分野を専攻するにあたって、総合的判断力・批判力を養うために広く諸学問を学ぶ〔文化総合科目〕、造形という大きな視点から専門性の位置づけや基礎を確認するために、自分の専攻とは異なった領域や他学科の開設する授業を学ぶ〔造形総合科目〕、個々の学科が独自に専門的能力を追求する〔学科別科目〕の三者をバランスよく統合したところに、真の造形教育が成立すると考えるからです。〕

大学院造形研究科の教育目標

（修士課程）各コースの目標は、『武蔵野美術大学 大学総合案内』に詳らかにされている。

美術専攻各コースでは、「将来の創作活動への方向性を見据えながら、作家として自己確立を目標とする」（日本画コース）、「画家や美術家になるための重要なステップ」（油絵コース）、「次世代を担う表現者、研究者を育成する」（版画コース）、「将来彫刻家、美術家を目指す者として」（版画コース）とあるように、作家、美術、専門家を目指している。さらに、「美術史、美学、芸術学などの分野の学術研究を目的とする」（造形理論・美術史コース）、「社会と文化を結ぶ領域でのさまざまな活動と政策のあり方を学び、新たな文化活動の展開を研究し、新たな価値観を形成し発信していくことが出来る文化と芸術を支える仕組みを考えていくこと」（芸術文化政策コース）を目標にしている。

また、デザイン専攻では、「ダイナミックなプロセスとしての視点から、実践と理論の研究を通して新しいデザインの模索を行い、自己の専門分野の確立を目指す」（視覚伝達デザインコース）、「学部4年間の学習を基礎にしながら、それぞれが研究テーマを定め、社会との連関や造形性などを考えながら、計画や作品制作を深化させていく」（工芸工業デザインコース）、「それぞれが独自の研究テーマを掲げて人間と空間の関わりを追求し、より豊かな環境創造をめざす」（空間演出デザインコース）、「学部4年間の建築設計の総括の上に立ちながら、それが社会的・経済的そして文化的背景とどのように関連づけられているかを精緻に研究する」（建築コース）「デザインの理解を社会的・人間的・文明的な文脈に広く求め、逆にそれらの文脈の中にデザインの研究・応用領域を開いていく創造的な研究」（基礎デザイン学コース）、「現代のあらゆる側面で機能している映像のさまざまなかたちを分析し、『映像とは何か』を、さらには『どんな映像が可能か』を考え、個人的表現から社会的機能まで、その可能性を追求し、全方位的に研究を展開する」（映像コース）、「現代の写真環境を全方位的・複合的に捉え直し、それをいかに新しい表現にむすびつけていくかを、ともに考察し、充実した表現の場で実践していくこと」（写真コース）、「造形的観点、認知心理学観点、技術観点からの研究のみならず、文化的、社会的、経済的、地球環境的視点といったグローバルな観点からの問題を発見し、情報技術との関連で研究し、問題を解決する新しい提案を行い、社会に寄与する」（デザイン情報学コース）を目標にしている。即ち、制作者・表現者としてだけではない、広く奥行きのある視点から新しい領域にまで到達するような研究や実践を展開し、社会と文化の創造・発展に寄与する研究者の養成を謳っていることができる。

修士課程各コースに通底しているのは、まさしく、「造形学部における一般的・専門的教育の基礎のうえに、美術・デザインに関する専門の技能、理論および応用を教授研究し、その深奥を究めた人材を養成することを目的としてきました。」（前掲書『武蔵野美術大学のあゆみ1929—2009』）の大学院造形研究科の教育目標なのである。

（博士後期課程）は、修士課程の教育課程を基礎としながらも、修士課程の美術専攻とデザイン専攻を統合的に再編し、専門の深化にも対応するものである。その三つの研究領域は相互に他の領域と有機的に結びつき、横断的な関係の中で「突出した」人材の輩出を目指している。

2. 点検・評価

造形学部と連携・連動しながら、各コースが独自の理念を明確にし、「研究」や「専門性」のある教育を展開する中で、多くの作家、研究者を育てていることは第3期自己点検でも評価されていることであり、修士課程の2年間は学生と教員が密に接し、お互いの考え方をぶつけ合いながら成り立っている。これらの現状を鑑みると、修士課程において各コースの理念は適切に設定されていると言えるだろう。

一方で、学部教育との差異や開設間もない大学院博士後期課程と修士課程との関係性において、またその大学院組織においてわかりづらいという指摘（平成20年度（財）大学基準協会）があることも事実である。

第4期自己点検・評価委員会で実施された学生、教員へのアンケートからは、現在の大学院のあり方が決して万全なものではなく、大学院の教育内容、教育組織を検討改善すべきであるといった意見も少なからず見受けられた。以下、アンケート調査から大学院の現在を点検する。

両調査の回収率は決して良いとは言えないが、学生、教員の大学院における生の声が聞こえ、有意義のものであったと評価できる。しかし、回収率の悪さから推測すると、大半の教員は現在の大学院を取り巻く環境に肯定的、もしくは、いた仕方なしと思っているようであるが、学生の自由記述には、切実な内容も含まれていた。

はじめに、教員の側からの意見、改善要求など、理念に関わるようなものをいくつかの記述を列挙する。現在、教員の修士課程における指導目標は、圧倒的に作家、研究者としての自立をあげている。それは教員への質問12『大学院ではどのような人材を育成すべきか』の中で細部が見えてくるのだが、「この課程に入り、修了すると学部4年間でベースとなって生かされ、作家としての方向付けが得られます。美大（油絵）は6年間（学部と修士）で完結するのでは、とこのごろ思います。」「大学がもっと真剣に作家を育てるつもりにならないと、どうしようもないでしょう。今まで勝手に作家になった人たちを都合よく利用する大学の姿勢はとても問題だと思えます。」「視覚伝達デザインにおける大学院修士課程は、研究対象を見定め、自らを磨く重要な時期であると考えます。大学の施設と人的ネットワークを存分に活用し、視覚伝達デザインの専門家としてのプライドをもつが癖になることを期待します。さらにコミュニケーションを大切に産業や社会に寄与できうる人材育成を心がけています。そこで最も重要なことは自分で考え、実行する力と、豊かなコミュニケーション能力だと思います。」「最近の他大学に見られる学部で習得できなくなった専門性を学習するための受け皿にならないような明確な教育の違いを明らかにすることを前提に、研究機関として、造形教育に関する研究のできる人材育成。特に初等、中等教育の美術、デザイン教育に関する研究と指導のできる人材。」「私たちは技術的なノウハウだけでなく、ビジネスを伴った創造性を統合することができる修士課程の学生を養成する必要がある。」等がある。

一方の学生側への質問5『修士課程進学の原因は何ですか』（複数選択可）においても「作家、デザイナーになりたいから」29人、「学部の教育だけでは十分な知識、技術が身に付かなかったから」29人、「さらに研究を続けたいから」28人であり、全体の動機選択肢の中でも、作家、研究者になることを前提に修士課程へ入学してくるものが多いことが読み取れる。

そこで重要になるのは、それら作家、研究者を育てるための現在の教育環境、教育システムだと考えられる。大学院の指導組織、指導内容、指導環境に対しての学生側からの耳の痛い記述をいくつか列挙する。質問29『あなたの所属する専攻の教育研究について感じていることを自由に書いてください』については、「美術は作品だけで成り立っているのではない。社会的背景、文化的背景、個人の好みなどいろいろなバックグラウンドの上に形成される。例えば美術史や美学を学ぶものはその作品が作られた背景をよく知るべきだし、制作系のものならば、そういった背景をもとにして作品に反映させることも可能だろう。よって一般共通カリキュラムでは、美術と関係のないような授業、例えば数学、物理、文化史などをもっと取り入れるべきだと思う。」、

「大学院修士が受けるべき環境が整っていない。個人で使えるパソコンや機材が少ない。というか無い。工具の貸し出し期間が短く種類も少ない。多学科との連携が無く、気軽に他学科と交流できない。カリキュラムが無く、自由すぎるので、ある程度大学側の補助が必要。教育機関なのだから、大学院生をどのように育てていきたいか、という理念を持つべきである。それが見えてこない。」「博士後期課程はできて数年しかたっていないということもあり、何か内部の仕組み、内容がすべて中途半端な感じがしました。まだシステム自体が出来上がっていない感じ。先生たちもどうあつかって進めていけばいいのか、手探りの状態だったので、こっちはよくわからないうちに終わってしまったような気がします。もう少し構造自体をしっかりと考えた方がよいと思う。あと留学生ばかりがやたら多いのも何かよくない気がします。もっと内部の学生が入りやすいように（入りたいと思うように）工夫した方がよいと思う。修士と博士の間に妙な断絶がありすぎて、修士までは進学してもそのあとまでは続かないように思う。論文も書きやすいように授業を変えた方がよいと思う。そのための特別授業を設けるとかしてほしかった。もっと論文を書きやすいシステムに変えていくべきだと思います。」「担当教授を指名できるとよかった。もっと先生たちと話ができる環境が欲しい。公表の教官を指名できるなど。」「課外講座を増やしてほしい（特に現代美術家を呼んでほしい）。ここ数年、極端に少なかったように思います。新しい刺激にもなり、ぜひ積極的に行ってほしいです。生徒数が多いためか、その分教授と接する機会が少ないように感じます。」など必ずしも現状の教育環境に満足していない学生たちが、少なからずいることが見受けられる。

一方で、教員側のアンケートの質問6『大学院修士課程の授業内容について、特に工夫されていることはありますか』ではユニークな回答も多々あり、教員側の積極的な関わり方が興味深い。「作品に応じて外部の仕事などに参加させている。逆に外部のテーマに応じて作品を作らせている。学外の接点をできる限り増やすよう心がけています。」「定期的な指導以外のコミュニケーション（例えば課外講座の講師を交えた飲み会など）を持ち、あらゆる角度から自分の作品を考察してもらいたいと思っている。」「他学科研究室と展示およびテキストの制作を行う。できる限り多くの教授や専門家を関わらせる。客員教授のゼミを、学科をまたいだ形で実施する。作品を社会的な場で展示する機会をできる限り多く作る。」「今年度より大学院一年生を必修とし、学部生と合同のプロジェクトを実施。院生が主体的に学部生を主導できるように工夫している。文化政策の実践的なプログラムとして試みている。」グループミーティングを不定期的に行う。作品指導に偏らず、展覧会場法から世間話まで広く話題にし、教員からの一方的な指導ではなく、会話と情報交換がお互いを刺激し合える関係となることが望ましい。」等ほかにも沢山の教員個々の工夫が寄せられている。

また、学生側から指摘のあった担当教員以外の方にも横断的に指導してもらいたいという要望についても、現在積極的に実施している教員が多くみられ、慎重にあるべきだという意見が無いではないが、アンケートに答えた殆どの教員がそれに賛成している。少し長いですが、横断という意味において特徴ある意見を一つ挙げる。「担当教員以外の方にも横断的な指導を求める話は賛成です。（中略）大学院制作発表の場が毎年優秀作品展として開催されていますが、作品展示としての位置づけのみで、論文や研究を発表する場が用意されていません。本がおかれるだけでは意味が無いと指摘しました。発表のプログラム、冊子、記録などを含めて新宿サテライトを活用する提案も合わせてしましたが、まだご返答はありません。大学院生に必要なことは、自分の研究を広く公開するチャンスができるだけ多く与えられることだと考えます。本学のような美術大学はその発表の場をイコール個展や展覧会、コンペティションに括れがちだが、様々な領域の学会発表、社会参加などほかにも多くの発表の機会が存在すると考えます。新聞テレビラジオなどのマスメディアから学外での様々な形の発表、インターネットの活用などは、大学のプロジェクトとして取り組むべき活動であると考えます。個々で重要なのは公開できる記録を作る体制だと思います。専門で関わる教員と職員が必要でしょう。修了生のネットワークを再確認するだけでも、また地方の大学や留学生の母国との繋がりも、大きな財産です。積極的な交流計画が必要だと思います。」

上記のようにアンケートによる点検結果は、理想を高く掲げるため記述において辛口なものもあるが、美術専攻の施設の充実や教員と学生が持つ大学院への共通のイメージ等を見ると、美術専攻においては大筋で問題となることは少なく、理念や目的に沿った形で運営されていると言えるだろう。

しかし、デザイン専攻においては施設の問題、交流の問題、外国人留学生への対応など難しい課題もあり、理念に沿った形で体制ができているとは言えない状況もあるのではないかと思われ、適切に対応していくべきだろう。

3. 将来に向けた発展方策

理念の周知が必要である。[点検・評価]で述べたように、双方のアンケートを詳細に見ていくと、教員側の熱意と工夫に対する回答と一部の学生たちの意見には微妙な食い違いが見て取れる。理念の適切性やその実績、個性化への対応などは各コースにあり、教員の指導体制や制作場所などの資源から見て、現在のあり方は問題を抱えながらも機能しているし、多くの学生は肯定的に大学院を考えている。にもかかわらず、この食い違いがあるのは、専攻やコースによって大学院への力の入れ方が違うのか、教員の大学院に割く時間や個々の考え方の違いから一部の学生たちと意思疎通ができていないのか、いずれにしても大学は現在ある理念を構成員全体に周知させ学生たちの意見にも耳を傾けながら理念に沿った指導時間、指導内容、指導環境、指導組織、などの大学院における教育環境を十分に検討し、改善すべき点は早急に改善していく必要があるだろう。そして現在ある各コースの理念を十分尊重し、それを社会に公表しながら、新しい大学院像を考えていく重要な時期が来ているのではないかと思われる。